

# 症例検討会



志学会

令和3年3月19日(金)

Zoom ミーティング

## プログラム

演 題	発表者	所属
1 急性壊死性潰瘍性歯肉炎が疑われた猫の1症例	富永 敏秀	トミー犬猫病院……………01
2 無痛性潰瘍を呈した好酸球性肉芽腫群と診断した猫に対してアレルギー特異的IgE検査を実施した1症例	為近 俊幸	なにわ動物病院 ……………02
3 犬60頭における欠如歯・埋伏歯の発生率とその特徴	鈴木 隆幸	さかたに動物病院……………06
4 診断に苦慮した嘔吐症状の1症例	原田 敢	平成動物病院 ……………08

## コメンテーター

奥田 優 教授	山口大学 共同獣医学部 副学部長 獣医内科学研究室 教授 / アジア獣医内科学 専門医
板本 和仁 准教授	山口大学 共同獣医学部 動物医療センター副センター長 伴侶動物医療分野伴侶動物外科研究室 准教授

# 急性壊死性潰瘍性歯肉炎が疑われた猫の1症例

富永敏秀 トミー犬猫病院

## 要約

雑種の猫に歯肉の壊死と顎骨の露出を認めた。全臼歯抜歯を行い顎骨の露出部と歯窩を縫合したところ、治癒に至った。歯肉の壊死について、文献の検索を行ったところ猫の急性壊死性潰瘍性歯肉炎（Acute necrotizing ulcerative gingivitis : ANUG）が考えられた。

## はじめに

急性壊死性潰瘍性歯肉炎（以下 ANUG と省略）は、疼痛の伴う歯肉の感染症である。人の場合、ANUG がもっとも頻繁に起こるのは喫煙者やストレス化で衰弱している患者である。危険因子として、不良な口腔衛生、栄養欠乏、免疫不全（例、HIV、免疫抑制剤の使用）、および睡眠不足、口腔内カンジダ症の併存がある。しかし、ネコの ANUG は、詳しく知られていない。

## 症例

8歳齢、去勢雄、雑種猫、毎年ワクチン接種、フィラリア、ノミダニ予防薬毎月投与。生後1歳未満の時にヘルペスウイルス感染症にて右目結膜の癒着。2歳6カ月齢の際の定期健診にて、猫エイズウイルスの感染が認められた。症例は3日間帰らず、ようやく家に戻ると衰弱した状態だった。左右の下顎の歯肉が壊死して顎骨の露出が認められた。また、左上顎の臼歯にも歯周病による歯肉の炎症が認められた。血液検査の結果、異常は認められなかったため、全臼歯抜歯を行ったところ元気食欲を取り戻した。

## 考察

症例は猫エイズウイルスキャリアであり、そのほか様々な要因で口腔内の免疫状態が悪化し、歯肉の壊死に至ったと考えられた。このような歯肉の壊死が認められるのは ANUG である。ANUG も一般的には、何らかのストレスや免疫抑制で発症するとされているが、本当の原因は分かっていない。原因となる嫌気性菌が存在するといわれるものの、今回細菌培養で検出できなかった。原因菌は嫌気性度が高く、通常の培養検査で培養されないとも言われている。次回このような症例に遭遇した際は原因菌の同定が課題と感じた。

## 参考文献

1)野口道修、網本昭輝、谷村寿恵、鈴木敏之、宮本忠、鹿江雅光、磯貝恵美子、梅本敏以子：猫の急性壊死性潰瘍性歯肉炎の1例、日本獣医師会雑誌、49巻（1996）6号

# 無痛性潰瘍を呈した好酸球性肉芽腫群と診断した猫に対して アレルギー特異的 IgE 検査を実施した 1 症例

為近 俊幸 Toshiyuki TAMECHIKA<sup>1)</sup>

なにわ動物病院<sup>1)</sup>

## 要約

無痛性潰瘍を呈した好酸球性肉芽腫群と診断した猫にアレルギー特異的 IgE 検査を実施し検査結果を基に加療したところ最終的に食物アレルギーを優位に疑う症例を経験した。

## はじめに

猫の無痛性潰瘍は無症候性で口周囲の潰瘍性病変を主徴とする臨床病型であり、好酸球性肉芽腫群の 1 亜型に分類される。好酸球性肉芽腫群の背景原因として、感染症、蚊刺性過敏症、皮膚炎、外傷などが考えられる<sup>1)</sup>。

今回、無痛性潰瘍を呈した好酸球性肉芽腫群と診断した猫にアレルギー特異的 IgE 検査を実施したところ、以下の知見が得られたので報告する。

## 症例

日本猫雑種、未去勢雄、1.5 ヶ月齢時に保護後は完全室内飼育。6 ヶ月齢時に去勢手術を希望し来院した。体重 4.0 kg、健康状態良好も口唇部の発赤・びらんが認められたため（図 1）、皮膚表面の細胞診（びらん部押捺）を実施したところ、多数の好酸球の浸潤が認められた（図 2）。



図 1 初診時肉眼所見

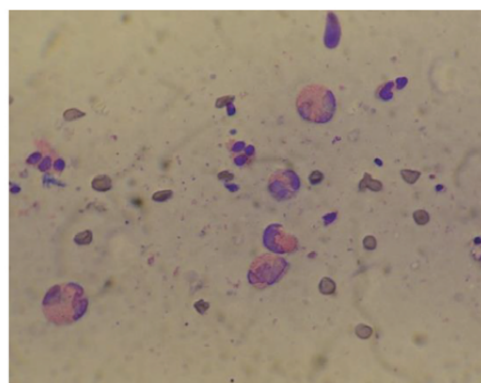
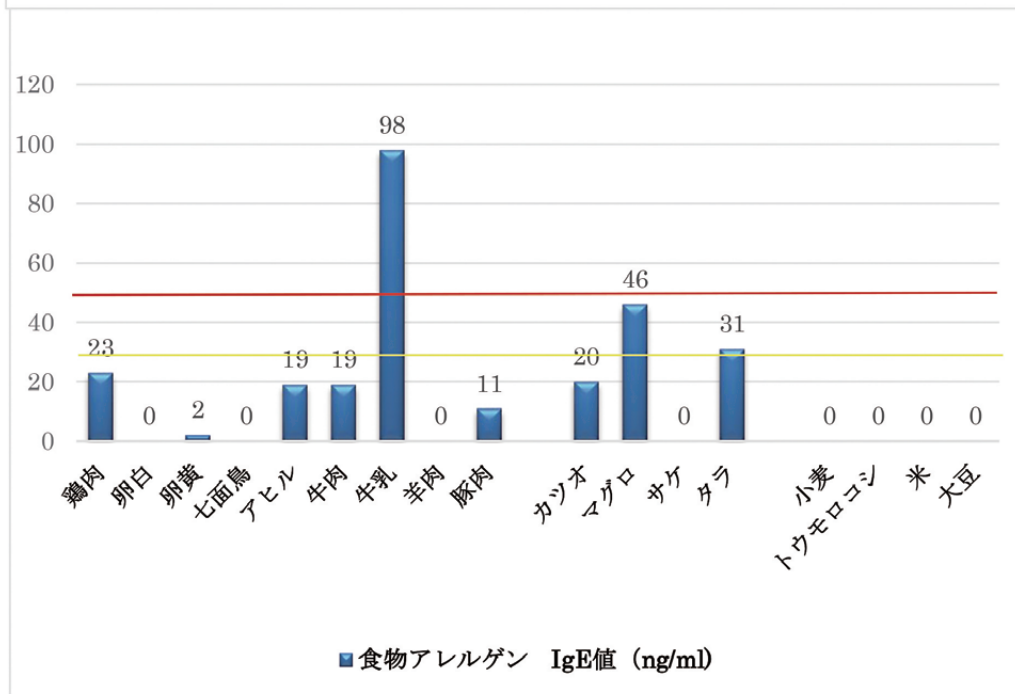
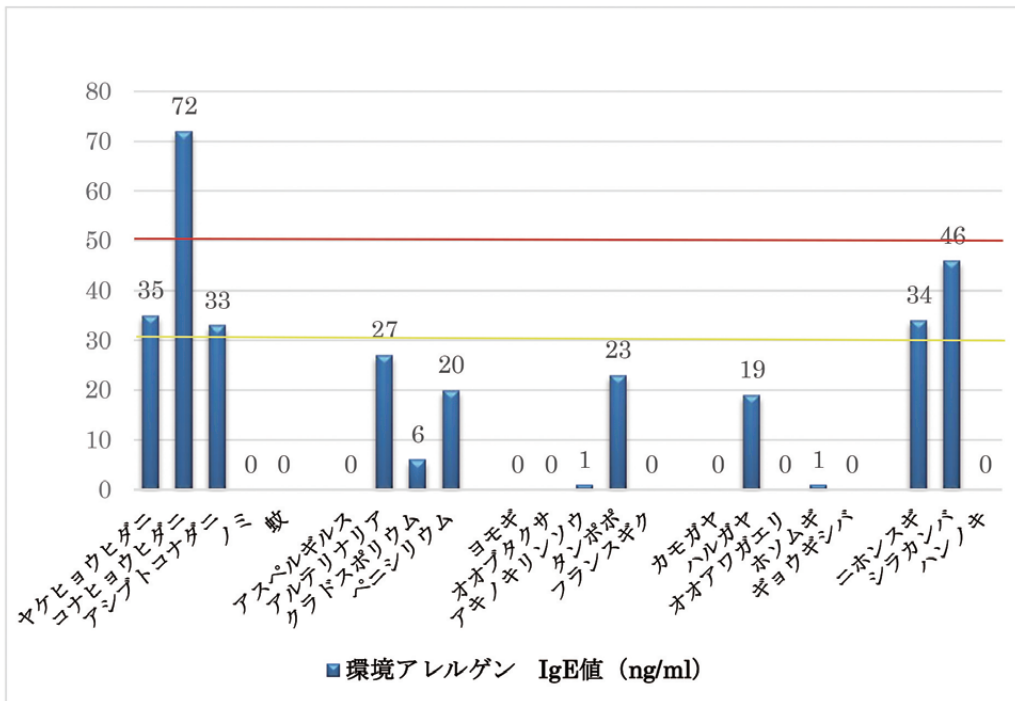


図 2 細胞診所見

飼育開始時からノミ寄生は認められず、2 ヶ月齢時および 3 ヶ月齢時の 2 回、経皮吸収型内外部寄生虫駆除剤の投与歴があった。また糞便検査において消化管内寄生虫陰性であった。

本時点で、いわゆる口唇部無痛性潰瘍を呈した好酸球性肉芽腫群と診断し、I 型過敏症の関与を検討する目的で猫アレルギー特異的 IgE 検査を実施した（図 3）。



陽性域：(≥50) 要注意域：(30~49) 陰性域：(0~29)

図3 症例におけるアレルゲン特異的IgE値

セファロスポリン 19mg/kg BID 3 日間実施もびらん病変は消失せず、初診から 12 日目には病変が拡大していた。

本時点よりプレドニゾロン 1.25mg/kg SID 3 日間、以降同 0.63mg/kg SID 4 日間 の計 7 日間投与したところ、びらん・発赤はほぼ消失した (図 4)。



図 4 プレドニゾロン治療後肉眼所見

また、鶏肉とマグロを各々主成分とする 2 種類のドライフードおよびマグロ・牛乳成分を含んだおやつ類の食事内容であったため、検査結果を参考に、マグロおよび牛乳を含む食品の摂取は中止し鶏肉を主成分とするドライフードのみの食事内容への変更を指示したところ、病変消失後 3 ヶ月時点での猫アレルギー特異的 IgE 検査において、すべての検査項目において陰転した (すべて 0ng/ml)。

現在、市販低アレルギーフード (七面鳥、豚・大豆・米等含む) のみに変更し 1 年以上経過しているが症状の再発は一度も認められていない。

### 考察

今回、上口唇に潰瘍病変を呈し無痛性・非掻痒性かつ皮表細胞診にて好酸球の顕著な浸潤が認められた、いわゆる無痛性潰瘍を呈した好酸球性肉芽腫群と診断した猫にアレルギー特異的 IgE 検査<sup>2)</sup> を実施したところ、環境アレルギー 22 項目中コナヒョウヒダニが陽性域であり、4 項目 (ヤケヒョウヒダニ・アシプトコナダニ・ニホンスギ・シラカンバ) に要注意域と、やや多くの項目のアレルギーに反応し、同時に、食物アレルギー 18 項目中、牛乳 1 項目が陽性域、マグロ・タラの 2 項目が要注意域と、多くの抗原感作が成立していると評価した。ステロイド剤に対する治療反応が良好であったことおよび本 IgE 検査結果から、各陽性～要注意域アレルギーを主な原因とする I 型過敏症を起因とする無痛性潰瘍を呈した好酸球性肉芽腫群と診断した。以上より、好酸球性肉芽腫群の背景原因の診断に本検査系を用いることが有益であることが示唆された。

本症例については 9 月頃の発症という季節的要因から、陽性結果であったコナヒョウヒダニを原因とする猫アトピー症候群の可能性はあるが、6 ヶ月齢時頃の初発であることから猫アトピー症候群と考えるよりも、それまでの食事内容から鶏肉および七面鳥肉を主成分とするドライフードのみに食事内容を変更後再発が認められないこと、変更後 3 ヶ月時点での IgE 値が陰転したことから、IgE の関与する食物アレルギー (特に牛乳およびマグロに対するアレルギー) の可能性を優位に考えた。

しかしながら、病変が口唇部に限局されていること、消化器症状を併発していないこと、6ヶ月齢という若齢にもかかわらず複数の環境アレルゲンの感作が成立していること、等の疑問が生じ、いわゆる犬の食物アレルギーとは異なる病態機序が推測された。

ヒトの IgE 介在性食物アレルギーにはアレルゲンの感作経路と発生機序によってクラス 1,2,3 と分類する考えが提唱されている<sup>3)</sup>。そこで全くの仮説であるが次のように推論した。

ヒトにおける口腔アレルギー症候群（以下 OAS）はクラス 2 食物アレルギーに分類されており、花粉症やラテックスアレルギーの患者においてある種の野菜や果物を摂取したときに様々なアレルギー症状を呈し、花粉やラテックスに対する IgE 抗体 (Bet v1, Bet v2 等) が食物中の交差反応抗原と反応することによって発症すると考えられている<sup>4)</sup>。またヒトの OAS 患者の食物抗原特異的 IgE 抗体陽性率も多数の食物抗原に感作されていたと報告されている<sup>4)</sup>。OAS の抗原は過熱や消化液で不活化されやすいため、消化器症状を呈することなく口腔において症状発症の頻度が高いと言われている<sup>3) 4)</sup>。また従来クラス 1 食物アレルギーは経口感作（経腸管感作）であるが OAS は吸入・接触感作の違いがある<sup>3) 4)</sup>。

よって症例は、日常摂取していた食物（市販ペットフード）成分に含まれるある種の抗原が「採食行為の入り口」である口唇部で経皮吸収（接触感作）され、日常的にアレルギー反応を生じ、徐々に潰瘍病変を強く構築していったのではないかと推察した。

しかしながら、ヒトの OAS は原因物質が野菜・果物であり本症例が好んで野菜や果物を摂取したとは思えず現実的とは言えない。ならば経皮吸収（口唇部）を感作経路とし、クラス 2 と同様に感作抗原とは異なる原因食物すなわち交差抗原によっても発症し、その原因食物として魚等も含まれるクラス 3 食物アレルギーに近い病態なのかもしれない。

いずれにせよ、本症例のように多くの抗原に反応した検査結果の場合、「交差反応」「交差抗原」の可能性も考慮して、結果評価および診断をすべきであることを認識した。

今後は症例の IgE 値を経時的に追跡し、症状の有無と照らし合わせて評価すると同時に、類似症例を蓄積し同様に評価していきたい。

#### 参考文献

1. 村山信雄「好酸球性肉芽腫群」Small Animal Dermatology 49 15-17 インターズー (2018)
2. 増田健一、AAACL ニュース アドバンス Vol.20 「猫のアレルゲン特異的 IgE 検査」 (2019)
3. 宇都宮奈穂子「IgE が関わる食物アレルギー」(2017)、VIP Vol.4 44-49 動物アレルギー検査株式会社 (2016)
4. 朝倉光司、「口腔アレルギー症候群」日本耳鼻咽喉科学会会報 Vol.112 38-41 (2009)

## 犬 60 頭における欠如歯・埋伏歯の発生率とその特徴

鈴木隆幸 池田俊介 酒谷篤 香西良咲 飯尾祥子 酒谷理加  
さかたに動物病院

### 〔要約〕

避妊・去勢手術を行った犬 60 頭について、欠如歯・埋伏歯の調査を行い、発生率とその部位別の特徴を調査した。体重 10kg 未満の個体で欠如歯、埋伏歯を多く認め、その発生が多い部位が存在した。

### 〔はじめに〕

埋伏歯は、嚢胞や腫瘍の形成などの原因となることは広く知られているが、その報告は少なく、含歯性嚢胞や短頭種に関連する報告が多い。今回は、日常の診察でよく見かける臨床的な欠如歯を、欠如歯、埋伏歯に分け、発生率とその特徴を調査した。

### 〔方法〕

当院において避妊・去勢手術を行った犬 60 頭を、麻酔下で歯列を確認した。臨床的に欠如歯を認めた個体は、口腔内レントゲン検査にて欠如歯と埋伏歯を鑑別し、欠如歯と埋伏歯の両方を持つ個体は、埋伏歯を 1 本でも含める場合は埋伏歯ありとした。欠如歯・埋伏歯の発生率とその部位別の特徴を調べた。

### 〔結果〕

調べた 60 頭の月齢は 6～56 ヶ月齢であり中央値は 8 ヶ月齢であった。体重は 10kg 未満の個体が 47 頭、25kg 未満が 10 頭、25kg 以上が 3 頭であった。60 頭の内、欠如歯あり 19 頭 (31.7%)、埋伏歯あり 14 頭 (23.3%) であった。体重別でみると、10kg 未満で欠如歯あり 16 頭 (26.7%)、埋伏歯あり 14 頭 (23.3%)、25kg 未満で欠如歯あり 2 頭 (3.3%)、25 kg 以上で欠如歯あり 1 頭 (1.7%)、10kg 以上の個体では埋伏歯を認めなかった。

次に欠如歯・埋伏歯を部位別に分類した。欠如歯 111 本、埋伏歯 22 本であり、上顎切歯は欠如歯 5 本 (4.5%)、埋伏歯 1 本 (4.5%)、下顎切歯は欠如歯 2 本 (1.8%)、埋伏歯 0 本、上顎前臼歯は欠如歯 25 本 (22.5%)、埋伏歯 4 本 (18.1%)、下顎前臼歯は欠如歯 31 本 (27.9%)、埋伏歯 8 本 (36.7%)、上顎後臼歯は欠如歯 5 本 (4.5%)、埋伏歯 3 本 (13.6%)、下顎後臼歯は欠如歯 43 本 (38.7%)、埋伏歯 6 本 (27.3%) であった。犬歯は上顎下顎ともに認めなかった。

### 〔考察〕

今回調べた 60 頭について、体重別に発生率をみると、欠如歯ありは 10kg 未満の群に最も多く認め、埋伏ありの個体は 10kg 以上では認めなかった。体重区分の頭数に偏りはあるが、体重が低い個体に埋伏歯、欠如歯が多い傾向となった。歯の部位別にみると、欠如歯は上顎・下顎前臼歯、下顎後臼歯で多く、特に下顎第 1 前臼歯、下顎第 3 後臼歯に多くみられた。埋伏歯は下顎第 1 前臼歯、下顎第 3 後臼歯に多くみられた。

今回は避妊・去勢時の個体に限って調べたため、永久歯の萌出・交換時期の個体も含まれ



ており、埋伏歯と未萌出歯（萌出遅延）の鑑別は困難であった。萌出時期は変化に富んでいるため、月齢だけでは埋伏歯とするか、未萌出歯とするかは判断が難しい。よって、今回は、6ヶ月齢以降の個体で臨床的に欠如歯があり、口腔内レントゲン検査で歯を認めた場合を埋伏歯として扱った。今回の調査では、多くが12ヶ月齢以下であったため、未萌出歯が含まれていた可能性も考慮する必要があると考えられた。

埋伏歯については、嚢胞や腫瘍の形成など様々な問題を引き起こす可能性があるが、根尖が閉鎖する前であれば、適切な処置により萌出も期待できるため、歯の成長期に注意深く歯列を確認し、臨床的な欠如歯を認めた場合は、埋伏歯について十分に説明していく必要があると考えられた。

〔参考文献〕

- Bellei E、Ferro S、Zini E、Gracis M: A Clinical, Radiographic and Histological Study of Unerupted Teeth in Dogs and Cats: 73 Cases (2001-2018) Front Vet Sci. 2019
- 藤田桂一著: 臨床のための小動物歯科、インターズー (2008年)
- 網本昭輝ら: 40頭の犬にみられた埋伏歯に対する処置と経過、動物臨床学、10 (1) 1-7 (2001)

## 診断に苦慮した嘔吐症状の1症例

原田 敢<sup>1)</sup> 平島 康博<sup>1)</sup>

1) 平成動物病院

### 要約

14歳齢の雑種犬が流涎、頻回の嘔吐を主訴に来院した。スクリーニング検査を実施したが、確定診断には至らなかった。対処療法として、補液、制吐剤、H<sub>2</sub> ブロッカー、抗生剤、プレドニゾロンを投与したが、患者の臨床症状は改善することはなく、徐々に体重は減少した。そこでフェノバルを投与したところ臨床症状は明らかに改善した。患者は臨床症状およびフェノバルへの治療反応から、フェノバル反応性唾液腺症と診断された。

### はじめに

フェノバル反応性唾液腺症とは人、犬、猫で報告されている<sup>1)</sup>。原因は不明であり、辺縁系てんかんの可能性が示唆されている<sup>2)</sup>。腫大した唾液腺は腫瘍性・炎症性変化を伴わず、唾液腺切除によって臨床症状の改善は得られない<sup>3)</sup>。下顎唾液腺が最も一般的に影響を受けやすいが、耳下腺、頬骨腺、舌下腺も同様に影響をうける可能性がある<sup>4)</sup>。確定診断は困難であり、フェノバル反応性唾液腺症の診断基準が設けられている<sup>5)</sup>。

### 《診断基準として》

- 1 典型的な患者の臨床症状（嘔吐、吐き気、悪心など）
- 2 両側唾液腺の肥大
- 3 胃腸症状を目的とした適切な内科療法への不十分な反応
- 4 唾液腺の細胞診、組織病理学的にて明らかな異常を認めない
- 5 フェノバルビタールに対する迅速な反応

### 症例

犬種：雑種（マルチーズ様） 年齢：14歳1ヶ月齢 体重：3.96 kg（BCS5/9）

雌雄：雄（去勢済み） 予防歴：混合ワクチン、狂犬病ワクチン、フィラリア予防毎年済

既往歴：クッシング症候群、僧帽弁閉鎖不全、胆嚢粘液嚢腫

主訴：流涎、夜間に5-6回の嘔吐（過去にも異物を誤飲した経歴がある）

### 身体検査所見

T 38.4 P 120 R 20 左心臓基底部より収縮期雑音（Grade4/6）

元気食欲（-） 両側の唾液腺の腫れ（+） 体表 Lym の腫れ（-）

## スクリーニング検査

(既往歴の僧帽弁閉鎖不全、クッシング症候群、胆嚢粘液嚢腫に伴う検査結果は除く)

- ・血液検査：LIP 319 U/l C-PLI 279 ug/l
- ・レントゲン検査：特記事項なし
- ・エコー検査：特記事項なし
- ・内視鏡検査：特記事項なし
- ・CT 検査：特記事項なし
- ・MRI 検査：特記事項なし

## 治療経過

初診時から第 26 病日まで対処療法として、補液、制吐剤、H2 ブロッカー、抗生剤、プレドニゾロンを投与したが、患者の臨床症状は改善することなく、体重は 3.9kg から 2.4kg に減少した。フェノバルを投与したところ臨床症状は明らかに改善した。第 200 病日に唾液腺の縮小が認められ、第 248 病日に投薬を中止したが症状の再発は認められておらず経過良好である。この時の患者の体重は 3.9kg であった。

## 考察

本症例は患者の臨床症状、およびフェノバルビタールへの反応および臨床経過からフェノバルビタール反応性唾液腺症が強く疑われた。フェノバル反応性唾液腺症は非常に稀な疾患であり、診断および治療に時間を費やしてしまったことは非常に反省すべき点であった。原因については不明ではあるが病態や治療に関してさらなる研究が必要と考えられた

## 参考文献

- 1 Boydell, P., R. Pike, and D. Crossley. Presumptive sialadenosis in a cat. *Journal of Small Animal Practice* 41 (12) 573-574 (2000)
- 2 Gibbon, K. J., Trepanier, L. A., and Delaney, F. A. Phenobarbital-responsive ptyalism, dysphagia, and apparent esophageal spasm in a German shepherd puppy. *Journal of the American Animal Hospital Association* 40 (3) 230-237 (2004)
- 3 Kelly, D. F., Lucke, V. M., Denny, H. R. and Lane, J. G. Histology of salivary gland infarction in the dog. *Veterinary pathology* 16 (4) 438-443 (1979)
- 4 Dagan, A. Sialadenosis in a dog. *Israel Journal of Veterinary Medicine* 66 32-35 (2011)
- 5 Boydell, P., Pike, R., Crossley, D. and Whitbread, T. Sialadenosis in dogs. *Journal of the American Veterinary Medical Association* 216 (6) 872-874 (2000)

## 志学会症例検討会委員

谷口 直樹（久野喜動物病院）  
橋本 祥男（シンシアペットクリニック）  
原田 敢（平成動物病院：準会員）  
吉田 圭佑（南が丘動物病院：準会員）  
吉村 清司（西日向動物病院：個人会員）  
横山 幸絵（猫の診療室）



# 志学会

## 志学会症例検討会委員

谷口 直樹 (久野喜動物病院)  
橋本 祥男 (シンシアペットクリニック)  
原田 敢 (平成動物病院)  
吉田 圭佑 (南が丘動物病院)  
吉村 清司 (西日向動物病院)  
横山 幸絵 (猫の診療室)

事務局

〒633-0064 奈良県桜井市戒重339-3  
Tel.0744-43-1340 Fax.0744-45-4615  
E-mail : info@shigakukai.jp